



成東高校同窓会報

第12号

2022. 6. 1

<https://cms2.chiba-c.ed.jp/narutou-h/>

発行：成東九十九同窓会
印刷：(株)サラト

卒業生は新成人

同窓会長 志賀 直温 (高19回)



も含めて青春を謳歌して欲しいと思います。

今年の三月、卒業式の前日に卒業生の同窓会加入式が行われ、理数科三九名、普通科二二六名、合計二七五名の前途有為な若者

達成東九十九同窓会の会員となり、母校成東高校から巣立ちました。
新型コロナウイルスが三年目を迎えた現状から思えば、今回の卒業生は、まさにウィズコロナの日々を過ごしたことになる。百年に一度とも言われている感染症の蔓延時期に高校生活を送った辛さはあったことでしょうか、明けない夜はないの喩えの如く、いずれ日常生活が戻った時にその分

私が成東高校を卒業してから既に五十五年が経過しました。振り返ってみると様々な思い出が去来し、これまでの道を悔いはなしと見る自分と、その時には戻れないことを幾分ほろ苦く思い起こす自分とがいることに気がつきます。

青春の思い出は、大人へと移行する頃の出来事がメインを占めていることを思うと、この三月に卒業し、四月には成人となった生徒達は、今までの二十歳が成人年齢だった世代と比較してここで大きな転換点を迎えたことになりました。人口減少期に向けてより社会参加を求められる環境に置かれる皆さんが、自らの道を目指して邁進されることを心から願うものです。



生徒数

合計	787名
男子	440名
女子	347名
クラス数	20クラス

卒業生数

合計	30,683名
旧制中学卒	4,620名
併設中学卒	545名

表紙紹介

題名「三年 冬」(本校のための書き下ろし連作)
漫画家 立原あゆみ氏 (本名市川洋一氏 [高17回卒])。
創刊号より連載していた12枚のイラストも今回は最終号となりました。御礼を申し上げます。

第116回

九十九同窓会 定期総会報告

記

例年、8月第一日曜日の午前10時に、百周年記念館で開催されていた総会は、コロナ禍のため、今年度は書面決議で実施されました。支部長を含めた各役員に総会資料が送付され、議事に関しては書面にて表決を諮り、承認されました。

内容は下記の通りです。



第115回定期総会の様子

- 一 開会挨拶
- 二 同窓会会長挨拶
- 三 校長挨拶
- 四 議事

- (1) 会務・会計報告
- (2) 監査報告

- (3) 同窓会会報の発行について
- (4) 役員改選について
- (5) その他

- 五 講演

篠原 靖志氏

演題

『故郷の地域医療』

『私の歩んできた道、進む道』

- 六 諸連絡

- 七 閉会挨拶

(資料)

- 一 会務報告

令和二年

7月8日 同窓会会計監査

7月8日 同窓会役員会

8月2日 同窓会第一一五回総会

令和三年

3月5日 同窓会入会式

3月6日 卒業式

7月5日 同窓会会計監査

7月5日 同窓会役員会



写真

右 百周年記念館
左 校舎・123本の桜が春になると満開です。



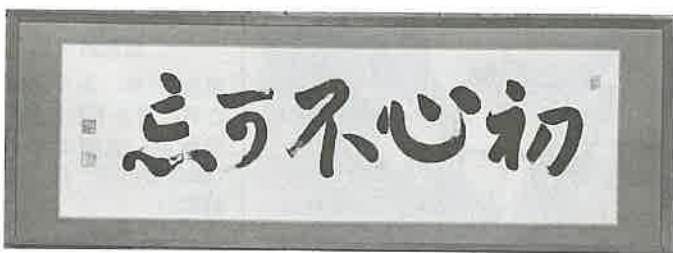
令和三・四年度 同窓会役員

- 顧問 清水 新次(高15回)
- 会長 志賀 直温(高19回)
- 副会長 金田 重興(高15回)
- 副会長 眞壁 力(高19回)
- 副会長 布留川信行(高20回)
- 副会長 海宝 弘和(高25回)
- 副会長 伊藤 恵子(高普35回)
- 副会長 新村 浩章(高普32回)
- 幹事 里見 勇(高16回)
- 幹事 長谷川 實(高17回)*
- 幹事 木嶋 由美(高20回)
- 幹事 平山みさ子(高20回)
- 幹事 清宮 清一(高20回)
- 幹事 内藤 光雄(高21回)
- 幹事 鈴木 正美(高23回)
- 幹事 林 喜一(高25回)
- 幹事 田井中善夫(高理1回)
- 幹事 上代 真澄(高普28回)
- 幹事 山本 重文(高普29回)
- 幹事 鈴木慶一郎(高普31回)
- 幹事 戸倉 富子(高普31回)
- 幹事 小林 弘明(高普36回)
- 幹事 西川 泰雄(高11回)
- 監事 小山 和典(高普30回)

* 水の幹事は今年度新たに推薦され、承認されました。

寄贈のご紹介

山武市松尾町の岩崎医院、岩崎達弥氏(高理6回)より、左記の書をいただきました。達弥氏の父である富士弥氏(中42回)が開院する際に、伯父の磯次氏(中10回)が揮毫されたそうです。ありがとうございました。



麻生 磯次氏

国文学者。東京帝国大学文学部卒。東大教養学部長、文学部長、第19代学習院院長を歴任。1970年文化功勞者。1974年旧山武町名誉町民第1号。市川市名誉市民。

記念講演

故郷の地域医療 ～私の歩んできた道、進む道～

地方独立行政法人さんむ医療センター
院長 篠原靖志(高理6回)



志賀同窓会会長より、令和3年度九十九同窓会総会定期総会において遠隔世代の代表として講演の機会をいただき準備をしておりましたが、コロナ禍第5波による緊急事態宣言が発令され、山武地域も最悪のフェーズ4の局面となったため中止せざるを得ない状況となつてしまいました。とても残念でしたが、同窓会報へ予定内容の要旨を寄稿させていただきます。

私は、東金の実家の家督を継ぎ地元の高校教師として働いていた父と、農業経営を支えた母との間に昭和35年に生まれました。そして現在も生家で妻と母と暮らし職場であるさんむ医療センターに通

勤しております。当時は当たり前だったのかも知れませんが、生家という名の通り長男である私は自宅で産湯につかっております。医師という職業を意識したのはかなり幼いころからでしたが、小学校3年生の時、後頭部、頸部、背部に大やけどを受傷し千葉大病院に救急搬送され1か月の入院生活を送った経験や、母が地域でお世話になっていた開業医の先生達をとても大切にしていた影響が多にあったような気がします。九十九里平野の田舎でのんびり育った私は昭和51年、祖父や父も同窓である地元の本校理数科に入学いたしました。当時の成東高校は今ほど広域から通学する生徒は少なく、地元出身者がほとんどで男子生徒の割合が多かったような気がいたします。理数科には理系大学の進学を目指す生徒が集まりましたが、3年間、柘植郁雄先生が担任してくださり数学の指導を受けました。先生の薫陶のもと、同級生の多くは勉学に集中していきましたが、私自身は勉強が嫌いからか、写真部に入部し放課後も課外活動を楽しんでいました。記憶しています。そんなのんびり生きていた私にも辛いことが起こりました。私が高校2年の秋、欧州視察研修から戻り休養を命じられて帰ってきた父は、閉塞性黄疸の診断のもと直ちに大病院に入院となりました。当時は、今ではこの病院にもある高性能なCTや超音波検査装置は大病院ですらなく、レントゲン透視化に椎体の位置を頼りに盲目的に穿刺し造影するという今では信じられない検査法で診断されていた。父に下された診断は肝門胆管癌という極めて治療の難しい病気で、上手に胆汁を体外に誘導するすべのないままに外科に移り手術を受けました。化膿性胆管炎併発の状態でしたので術中にショック状態となり、急遽手術は中止され何とか病室には戻ってきましたが、翌日亡くなってしまいました。優しい父を一瞬でなくしてしまいました。明確に医師を目指すこととなりました。とはいえ当時でも医学部のハードルはかなり高く、柘植先生の頑張れば何とかかなるとの言葉を信じ浪人の

上、日本で一番北にある医学部に何とか滑り込みました。医学部に進学できはったのもつかの間、大学での勉強はなかなか進級試験は追いつけず1発勝負でなかなかスリリングな6年間を過ごしましたが、故郷を遠く離れた北海道の大自然の中で青春を謳歌できた貴重な時間でもありました。卒業後は、東金市で父と懇意にしていた両総病院の吉永雅俊先生や地元の先輩外科医長嶋通先生のお導きにより、千葉大学第2外科に入学し、消化器外科医としてのスタートを切りました。当時は今のような臨床研修制度はなく直ちに専門診療科の1年目医師として働きましたが、朝の採血、点滴、静脈注射、患者さんの胸部レントゲンポータル撮影、輸血の交差適合試験、教授回診プレゼンテーション、カンファレンスの準備、手術の第3助手などなど、あつという間に1日が過ぎて家に帰れない日もかなり多くありました。2年目3年目になると関連病院に出張となりますが、手術の執刀医、入院患者さんの術前、術後管理を担当し地域の病院で大切に育てられ、ほとんどの消化器外科手術を経験し習得することができました。そして外科の修行以外に山に行ったりスキーに行ったりテニスをしたり、休む暇もなく遊ばせていただきました。4年目に大学に戻ると3年間かけて外科の臨床に従事しながら臨床研究に取り組みしました。成東地域にもご縁のある稲代胆道外科医章正先生に直接ご指導いただく幸運を得て、父が病んだ肝門胆管領域の3次元画像を構築し分析するというテーマで博士論文をまとめることができました。7年目になると、外科医長として南房総の山間部の狭小地域にある鴨川市立国保病院という小規模病院に赴任し2年間過ごしました。外科医は7年目の自分と医師2年目の後輩2名での出張でしたので、不安は尽きませんでした。自ら最終判断し実践した外科治療は外科医としての実力を大きく伸ばせたと思います。そして現在私がライフワークとしている緩和ケアや在宅医療のメインでも鴨川で地域医療を実践して

いた中村宏先生の影響を大きく受けたのだと思います。その後八街総合病院、大病院での勤務を経て平成9年より、半年はやく院長として赴任していた第2外科の先輩坂本昭雄先生にお声をかけていただき郷里の国保成東病院(現さんむ医療センター)に就職いたしました。赴任当時の成東病院は、経営不振で経営健全化計画の真っただ中でしたが、同時に日夜救急医療を頑張る、数年で経営改善を実現できたことを誇らしく記憶しております。ただ残念ながら、この後再び全国的な地域医療崩壊の大きな波に飲み込まれてしまい平成18年4月に全盛期は10名以上いた内科常勤医師が0名になってしまいました。厳しい環境でしたが、多くの患者さんを放置して立ち去った医師達に対する反省心もあり、心に火を燈して何とか踏ん張ろうとしましたが、みるみる間に経営状況は悪化、病院は破綻の危機に遭遇し国保成東病院を運営してきた一部事業組合は折曲折の末、構成市町村のそれぞれの思惑の違いから解散となりました。しかし幸運にも地域住民の皆さんのご支援をいただき平成22年4月から新設型地方独立行政法人さんむ医療センターとして再スタートを切ることができました。この様な病院の危機的状況を経験する中で、病院に残って働いてきた私も段々古株となり、立場もいつの間にか副院長、院長となり、一外科医としてというより地域医療を包括的に考えなければいけない立場となりました。不在となった内科医師の招聘にはすすまみませんでした。この様な病院でも外科治療以外で何か地域医療に貢献できることはないかと思案した末、看護師、薬剤師などのコメディカルの仲間とともに緩和ケアに取り組みすることにいたしました。緩和ケアとは、がん患者さんの全人的苦痛を和らげ、住み慣れた地域で最期まで療養を継続することを支える医療です。当地域を含めた外房地域の医療圏内にはがん診療の専門病院がなく消化器癌以外のほとんどのがん患者が遠隔地の施設で初期治療を開始しなければならぬ実情を踏

まえ、当地域にお住まいのがん患者さんの緩和ケアの中心施設となることを目指し、緩和ケア外来の開設、訪問看護・訪問診療の推進をしてまいりました。多くのがん患者さんが可能な限りの自宅での生活を希望する一方、病状が悪化した時には緩和ケアのための入院を希望されることも多いため、郡部ではまれな緩和ケア病棟の開設も平成26年に実現いたしました。今では臨床医としてはすっかり消化器外科から離れ、緩和ケア内科医として仕事をさせていただいております。そして病院を預かる立場としては地域の将来を見据えての医療構築を目指す必要があります。急速な高齢化に伴い地域住民の疾病構造は変化しました。生産年齢人口が大多数を占めた高度経済成長時代は、ほとんどの医療が病気の完治をめざし社会復帰を前提としたいわゆる病院完結型の医療であったと思いますが、退職者世代が多数を占める今後の医療は、複数の慢性疾患を抱えた高齢者のケアが重要となっています。このようなニーズを果たすべく、さんむ医療センターは令和6年に新病院が落成・開業予定です。私も当院と共に地域にお住いの皆様の生活を支える視点を置き、ゆりかごから墓場まで「ケア」できる医療を目指して頑張つてゆきたいと思っております。

以上、講演の要旨をまとめてみました。地域医療とはその医療施設にやってくる患者さんの診療をただ行うだけでなく、地域社会が抱える社会問題の解決にチャレンジしてゆくことであると思っております。これまでの医師としてのキャリアのほぼ3分の2を地元のさんむ医療センターで働いてきたおかげで、多くの幼少期からの恩師や友人やそのご家族、そして自分自身の身内の治療に関わることができました。これからは生まれ故郷で家族と暮らしを重んじ、地域医療にわずかでも貢献できるように精進してまいります。将来自ら医療人をめざす後輩の皆さんと共に働ける日を夢見て、お話を閉めたいと思っております。

いた中村宏先生の影響を大きく受けたのだと思います。その後八街総合病院、大病院での勤務を経て平成9年より、半年はやく院長として赴任していた第2外科の先輩坂本昭雄先生にお声をかけていただき郷里の国保成東病院(現さんむ医療センター)に就職いたしました。赴任当時の成東病院は、経営不振で経営健全化計画の真っただ中でしたが、同時に日夜救急医療を頑張る、数年で経営改善を実現できたことを誇らしく記憶しております。ただ残念ながら、この後再び全国的な地域医療崩壊の大きな波に飲み込まれてしまい平成18年4月に全盛期は10名以上いた内科常勤医師が0名になってしまいました。厳しい環境でしたが、多くの患者さんを放置して立ち去った医師達に対する反省心もあり、心に火を燈して何とか踏ん張ろうとしましたが、みるみる間に経営状況は悪化、病院は破綻の危機に遭遇し国保成東病院を運営してきた一部事業組合は折曲折の末、構成市町村のそれぞれの思惑の違いから解散となりました。しかし幸運にも地域住民の皆さんのご支援をいただき平成22年4月から新設型地方独立行政法人さんむ医療センターとして再スタートを切ることができました。この様な病院の危機的状況を経験する中で、病院に残って働いてきた私も段々古株となり、立場もいつの間にか副院長、院長となり、一外科医としてというより地域医療を包括的に考えなければいけない立場となりました。不在となった内科医師の招聘にはすすまみませんでした。この様な病院でも外科治療以外で何か地域医療に貢献できることはないかと思案した末、看護師、薬剤師などのコメディカルの仲間とともに緩和ケアに取り組みすることにいたしました。緩和ケアとは、がん患者さんの全人的苦痛を和らげ、住み慣れた地域で最期まで療養を継続することを支える医療です。当地域を含めた外房地域の医療圏内にはがん診療の専門病院がなく消化器癌以外のほとんどのがん患者が遠隔地の施設で初期治療を開始しなければならぬ実情を踏

まえ、当地域にお住まいのがん患者さんの緩和ケアの中心施設となることを目指し、緩和ケア外来の開設、訪問看護・訪問診療の推進をしてまいりました。多くのがん患者さんが可能な限りの自宅での生活を希望する一方、病状が悪化した時には緩和ケアのための入院を希望されることも多いため、郡部ではまれな緩和ケア病棟の開設も平成26年に実現いたしました。今では臨床医としてはすっかり消化器外科から離れ、緩和ケア内科医として仕事をさせていただいております。そして病院を預かる立場としては地域の将来を見据えての医療構築を目指す必要があります。急速な高齢化に伴い地域住民の疾病構造は変化しました。生産年齢人口が大多数を占めた高度経済成長時代は、ほとんどの医療が病気の完治をめざし社会復帰を前提としたいわゆる病院完結型の医療であったと思いますが、退職者世代が多数を占める今後の医療は、複数の慢性疾患を抱えた高齢者のケアが重要となっています。このようなニーズを果たすべく、さんむ医療センターは令和6年に新病院が落成・開業予定です。私も当院と共に地域にお住いの皆様の生活を支える視点を置き、ゆりかごから墓場まで「ケア」できる医療を目指して頑張つてゆきたいと思っております。

以上、講演の要旨をまとめてみました。地域医療とはその医療施設にやってくる患者さんの診療をただ行うだけでなく、地域社会が抱える社会問題の解決にチャレンジしてゆくことであると思っております。これまでの医師としてのキャリアのほぼ3分の2を地元のさんむ医療センターで働いてきたおかげで、多くの幼少期からの恩師や友人やそのご家族、そして自分自身の身内の治療に関わることができました。これからは生まれ故郷で家族と暮らしを重んじ、地域医療にわずかでも貢献できるように精進してまいります。将来自ら医療人をめざす後輩の皆さんと共に働ける日を夢見て、お話を閉めたいと思っております。

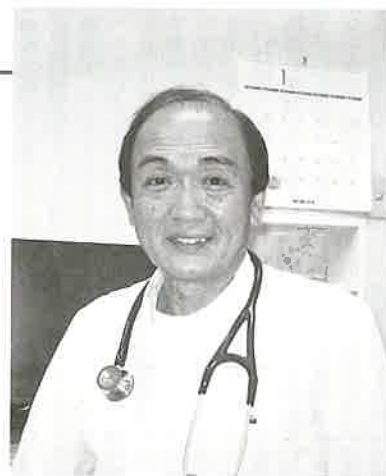
以上、講演の要旨をまとめてみました。地域医療とはその医療施設にやってくる患者さんの診療をただ行うだけでなく、地域社会が抱える社会問題の解決にチャレンジしてゆくことであると思っております。これまでの医師としてのキャリアのほぼ3分の2を地元のさんむ医療センターで働いてきたおかげで、多くの幼少期からの恩師や友人やそのご家族、そして自分自身の身内の治療に関わることができました。これからは生まれ故郷で家族と暮らしを重んじ、地域医療にわずかでも貢献できるように精進してまいります。将来自ら医療人をめざす後輩の皆さんと共に働ける日を夢見て、お話を閉めたいと思っております。

古稀の今よみがえる 松井衛先生の思い出

入学した年、昭和42（1967）年に現在の校舎が完成しました。2階のベランダから九十九里平野が一望でき、感動したことを今でも憶えています。私が「医学部を受験したい」と、松井衛先生にお伝えしたら、先生から「君が医学部に合格したら、オレは逆立ちで運動場を一周する」と、励まし(?)のお言葉を戴きました。

あれから26年の星霜を重ね、平成8（1996）年に地元九十九里町片貝に内科医院「古川クリニック」を開業しました。その折松井先生は開院の祝いとして、成東高校のモットーである

古川洋一郎 古川クリニック院長（高22回）



「質実剛健」の文字を染め抜いた手拭いを額に入れて、贈って下さいました。

「豊かな時代を良い仲間と温かな恩師と過ごすことが出来た。校歌の♪ああこの海ぞ我が進路 ああこの舟ぞ我が師友の通りだ」と、古稀にして思うこの頃です。

*松井衛(まもる)先生(高5回)
成東高校昭和39年〜54年社会科、平成4年〜7年校長として在職。同僚の松戸健氏(高2回)と共に本校野球部の黄金時代を築いた。

中西三郎・大塚洞元 先生との交流

創立間もない本校定時制に入学、担任は中西三郎先生で、先生には一生の指針を御教示頂いたように思う。卒業後数年して先生に媒酌の労をとって頂き、結婚式・披露宴当日の進行次第までも作成して頂いた。

又、大塚洞元先生にも目を掛けて頂いた。授業は結構厳しかったが、学校を離れると気さくでユーモアのある楽しい先生であった。

卒業して成人後は、詩吟の集いや飲み会にも気軽に参加頂き、愉快なひとときを過ごした。時には「拙庵を利用して・・・」のお言葉に甘えて、お寺を会場として使用させて頂いたりもした。それらは先生の息

今井 秀治(岳秀) 公益社団法人日本詩吟学院師範(高定2回)



抜きのお相手をさせて頂いた時の話だが、本来の先生は『校史』(昭和46年刊)を執筆されたりして、誠に立派な方であった。

上記両先生は博覧強記、授業以外でも多くの事を学ばせて頂き、感謝している。

私は、若い頃から漢詩・和歌・俳句・新体詩等の朗詠を楽しみ、学校で教科書に採用されているものの朗吟を教えたりもした。又今は、老人施設での慰問や指導をして、充実感のある生活を送っている。

コロナワクチン接種 で奮闘

コロナワクチン接種は、日本国民12歳以上に2回行うことが決められました。私は山武郡医師会東金ブロック長として、東金市民に安全で確実に接種が行えるよう、東金市役所との打ち合わせを企画致しました。昨年3月中旬より東金市各医療機関約40名に集まっていたが、薬剤師会も含め東金市担当者と4月末までに夜6時から9時まで3回の会議を実施し



柿栖 米次

柿栖眼科医院理事長 (高22回)

ました。個別接種を行う各医療機関との打ち合わせ、集団接種に参加して下さる医療機関とのスケジュール調整、さらに東金市民への接種計画の策定にと大変な日々を送りました。東金市にある多数の医療機関の方々の御協力があり、5月中旬から始まった接種事業は、11月下旬に無事終了しました。

令和4年からブースター接種があり、まだ終わりが見えませんが、今後もコロナウイルスと戦ってまいります。

* 柿栖眼科医院

祖父の代より続く眼科専門医院。東金駅近くの東金図書館前に所在。高齢化社会に伴い、高齢者の白内障の手術など医院の重要性が増している。

麻生磯次氏の句碑を 英訳

昭和31(1956)年、千葉大学教育学部英語科を卒業。卒論の指導教官は、百瀬甫先生で先生の友人の福原麟太郎先生にも指導を頂く。初任校は印旛郡の白井中学校で、以来県立佐倉高校(校長鈴木博氏中34回)の定年退職まで教員生活を送る。その後は国立千葉病院附属看護専門学校や明海大学等で教鞭を執る。その間1977年、ニュージーランド国オークランド地区巡回日本語教師として1年間家族で生活したことは、貴重な体験となる。

私の住む山武市埴谷(はにや)には、大木の枝垂れ桜で有名な長光寺(住職、飯塚通允氏(高4回))がある。境内

畑戸 輝夫

元旭中央病院附属専門学校講師 (高3回)



(70歳の頃)

には江戸文学研究者で元学習院院長、文化功労者の麻生磯次氏(中10回)の句を刻した碑「よしあしをこえて高嶺の月見かな」がある。

先年、観光で来日した外国人の見学者のためにと檀家総代鈴木祥司氏(中27回)が、住職の友人である私にこの句の英訳を依頼され、次のように訳してみる。

Neither good nor evil
At all. Only viewing the moon
O'er the lofty peak.

文武両道を体現 さらなる発展へ

校長 伊藤政利

九十九同窓会の皆様、第

三十六代校長として4月1日に着任しました伊藤政利と申します。微力ではございますが、誠意と情熱をもって本校教育活動に全力で取り組んでまいりますので、どうぞよろしくお願いいたします。

志賀会長をはじめ九十九同窓会の皆様には、日頃、母校成東高校の教育活動に御支援と御協力をいただいておりますことに改めて深

く感謝を申し上げます。

百二十年を超える歴史と伝統に輝く本校は、4月7日に二百八十一名の新入生を迎え、本校のさらなる発展に向けて、新年度をスタートいたしました。質実剛健の校訓と文武両道の教育方針の下、社会に貢献できるたくましく魅力的な次の世代を担う生徒の育成をめざしてまいりますので、引き続きの御支援と御協力をお願い申し上げます。



校長室にて

令和4年度入試 合格者数

大学名	現	浪
帯広畜産大	1	
山形大	2	
茨城大	4	
宇都宮大	1	
群馬大	1	
埼玉大		1
千葉大	15	
金沢大	1	
信州大	1	2
山口大	1	
高知大	1	
琉球大	1	
秋田県立大		1
前橋工大	1	
高崎経大	1	
千葉保健医療大	4	
川崎市立看護大	1	
金沢美術工芸大		1
岐阜薬大	1	
静岡県立大	1	
岡山県立大		1
国立大学合計	38	6

大学名	現	浪
酪農学園大	5	
つくば国際大	1	
国際医療福祉大	18	
上武大	1	
跡見学園女子大	1	
埼玉医大	1	
獨協大	5	
文教大	4	
文京学院大	1	1
明海大	8	
目白大	5	
日本薬大	1	
東都大	3	
神田外語大	28	
敬愛大	4	

大学名	現	浪
淑徳大	6	
城西国際大	21	1
聖徳大	4	
千葉経大	1	
千葉工大	43	9
千葉商大	4	
中央学院大	4	
帝京平成大	8	
東京情報大	4	1
東洋学園大	1	
秀明大	3	
麗澤大	6	
和洋女子大	9	
千葉科学大	8	
植草学園大	5	
青山学院大	13	3
亜細亜大	20	
桜美林大	2	
大妻女子大	3	
学習院大	22	1
北里大	8	
共立女子大	9	
杏林大	3	
慶応大	1	1
工学院大	3	
国学院大	19	1
国士舘大	9	1
駒澤大	16	
実践女子大	1	
芝浦工大	12	1
順天堂大	7	
上智大	4	1
昭和女子大	5	
女子栄養大	2	
白百合女子大	1	
杉野服飾大	1	
成蹊大	15	1
成城大	6	
専修大	37	1

大学名	現	浪
大正大	3	
大東文化大	8	
拓殖大	2	
玉川大	3	
中央大	20	
津田塾大	2	
帝京大	8	3
東海大	8	
東京医大	1	
東京家政大	4	
東京家政学院大	2	
東京工科大	3	
東京女子大	1	
東京電機大	5	
東京農大	6	
東京薬大	4	1
東京理大	5	3
東邦大	22	7
東洋大	68	14
二松学舎大	2	
日本大	85	10
日本社会事業大		1
日本女子大	2	
日本体育大	1	2
法政大	26	5
星薬大	4	
武蔵大	2	
東京都市大	2	2
武蔵野音大	1	
武蔵野大	26	1
明治大	16	5
明治学院大	9	3
明治薬大		1
明星大	3	
立教大	15	3
立正大	5	1
早稲田大	4	2
学習院女子大	1	
嘉悦大	1	

大学名	現	浪
東京医療保健大	7	
東京聖栄大	2	
東京医療学院大	2	
麻布大	1	
神奈川大	2	
フェリス女大	2	
帝京大	3	
びわこ成蹊大		1
京都産業大	1	
同志社大	1	
立命館大	3	
関西大	1	
第一工科大	1	
私立大学合計	838	88

学校名	現	浪
防衛大学校	1	
淑徳大短大部	1	
東京家政大短大	2	
東京交通短大	1	
日本大短大部	1	
上智大短大部		1
NIC International College in Japan	1	
国立清水海上技術短期大学校	1	
千葉職能短大	1	
その他の大学・短大合計	9	1

学校名	現	浪
東洋公衆衛生学院	2	
東京電子専門学校	1	
中央医療技術専門学校	1	
船橋情報ビジネス専門学校	2	
新宿医療専門学校	1	
文化服装学院専門学校	1	
旭中央病院附属看護専門学校	1	
専門学校合計	9	0

令和4年3月30日現在

元気に九十九祭

令和3年6月25日(金)に、一年ぶりの文化祭を開催しました。感染症対策に気をつけながら、工夫を凝らした催し物で盛り上がりました。
みんなの笑顔に学校中が明るくなった一日でした。



3年生 おばけ屋敷



吹奏楽部



ダンス同好会

今日では34の部活動・同好会が活動しています

運動部

野球、陸上競技、バレーボール、バスケットボール、サッカー、ホッケー、ソフトテニス、バドミントン、卓球、山岳、柔道、剣道、空手道、応援

文化部

吹奏楽、演劇、美術、書道、写真、棋道、茶道、文芸、英語、物理、化学、生物、天文

同好会

水泳、ダンス、フォークソング、パソコン、漫画研究、社会科研究、クイズ研究

部活動の活躍

陸上競技部

全国高等学校総合体育大会陸上競技大会
3年 佐藤 雅紀
女子やり投げ 予選19位 40m72cm

空手道部

全国高等学校空手道選抜大会
男子団体形 出場(大会中止)

書道部

第37回読書法展
入選 3年 堀越 真帆

編集後記

会報第十二号をお届け致します。今号は、新型コロナウイルス特別号とも言わべき形となりました。同窓会総会は断念。志賀直温会長の挨拶とさんむ医療センター院長篠原靖志氏の記念講演も要旨の寄稿となりました。

同窓生の近況報告では、地域医療に邁進する古川洋一郎、柿栖米次両氏と退職後の生活指針を実践されている畑戸輝夫、今井秀治の二氏です。会報創刊号以来紙面を飾ってきた立原あゆみ氏のイラストは、今回で終了となります。厚く御礼を申し上げます。

編集責任者

齊藤 功(高22回)

編集委員

花澤貞男(高26回)

伊藤清美(高32回)

井野克哉(高理40回)

あの人はどこ!?

・所在不明の方がたくさんおります。ご存知であればご一報ください。
 ・会報へのご意見やご感想もお待ちしております。

連絡カード

受付日	令和 年 月 日
記入者	

※逝去者の情報は「逝去者カード」にご記入ください。

連絡者	本人 家族 (氏名： その他 (氏名：	本人との続柄： 昭和・平成・令和 年卒業)
-----	---------------------------	-----------------------------

【異動 (変更・訂正) 内容】

※お判りでしたらご記入ください。

整理番号	
卒業年(回)	昭和・平成・令和 年 (回) / 科 組
氏名	姓 名 旧姓 (在学時姓)
住所	〒
勤務先	TEL
備考欄	TEL

逝去者カード

受付日	令和 年 月 日
記入者	

※下記の【ご記入にあたっての注意事項】をご覧ください。

連絡者	家族 (氏名： その他 (氏名：	本人との続柄： 昭和・平成・令和 年卒業)
-----	---------------------	-----------------------------

【お亡くなりになられた方の情報】

※お判りでしたらご記入ください。

整理番号	
卒業年(回)	昭和・平成・令和 年 (回) / 科 組
氏名	姓 名 旧姓 (在学時姓)
逝去年月日	昭和・平成・令和 年 月 日 逝去
備考欄	

【ご記入にあたっての注意事項】

- ・当カードをもって逝去者として管理いたします。
- 「告別式に参列・ご遺族からの連絡」など確実な情報のみをご記入ください。
- 「〇さんから聞いた。」「亡くなったようだ。」など曖昧なご連絡はお控えください。
- ・逝去年月日はお判りになる範囲でご記入ください。

この向きに入れてください

